

ZOCALO 2020 12 ▶ 2021 1

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

コレクション 4つの水紋

2021年1月23日(土) ~ 3月21日(日)

当館では1982年の開館以来、「印象派以後の西洋絵画」、「埼玉県ゆかりの作家の作品」を中心に収集を続けています。コレクションの一部は館内や屋外に常設され、とくに館内ではデザイン椅子でくつろいでいただきながら作品を身近に親しんでいける場を積極的に設けてきました。この展覧会では、「近年の新規収蔵作家」、「埼玉ゆかりの作家」、「デザイン椅子」、「屋外彫刻」を象徴する作家を1人ずつ選び、コレクションにおける自由な連想をお楽しみいただけるよう、幅広くコレクションをご紹介します。

長年をかけて蓄積されてきたコレクションを改めて見直すことで、思いがけない作品同士に共鳴が生まれるかもしれません。水面に新たに投げられた1滴が、ゆるやかに広く波紋を生み出すように、1人の作家から広がるイメージの連想をお楽しみいただければ幸いです。(K.M.)

I. 新収蔵作家 ポール・シニャック

平成30年度に《アニエールの河岸》を購入し、新規収蔵作家となったポール・シニャック(1863-1935)は、印象派に感銘を受けて画家として出発し、のちにジョルジュ・スーラの創出した新印象派を広めた画家として知られます。《アニエールの河岸》は、パリ北西の街、アニエールの景色を描いた作品です。全体に淡い色調で構成され、印象派の明るい色彩を受け継いでいる一方で、絵具を1筆ずつ置くような筆触からは、新印象派の理知的な分割技法への変化の兆しが窺えます。とくにセーヌ川の水面にみられる繊細な色を多様に用いた点描は、光の反射や水の動きを巧みに表現しており、この水面の表現こそ、シニャックが印象派の作風から新印象派へ移行の過渡期にあったことを象徴しています。ここでは、《アニエールの河岸》を起点として、シニャックが好んだ画題である水辺の風景や、点描など筆触に焦点を当ててコレクションをご紹介します。

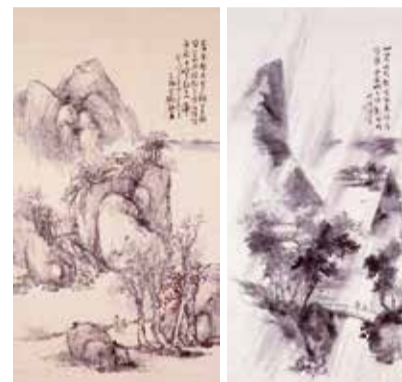


ポール・シニャック 《アニエールの河岸》1885年

II. 埼玉に生きた画家 奥原晴湖

近代黎明期に活躍した画家に、南画家の奥原晴湖(1837-1913)がいます。日本美術の歴史において、確かな画力で絵画制作を行う女性は中世の時代から存在しましたが、画家の妻や娘、あるいは武家屋敷などに仕える名もなき女房が大半でした。晴湖は、画家として身を立てた最初期の女性画家と言えます。幼少より書と画を学び、古典絵画に関する該博な知識を有した晴湖は、男性画家に伍して東京で活躍し、後半生を熊谷で過ごしながら制作に没頭しました。

《秋景山水図》と《山風溪雨図》は、ともに晴湖が描いた山水図ですが、両者の山容はまったく異なる様相を呈しています。晴湖は、師による教えや古典絵画の模写を通して、濃淡の抑揚、滲みの調子、流麗な線描など筆の扱いを習熟しており、その筆致の多彩さは、晴湖の作品の見どころのひとつと言えます。ここでは、晴湖の画風や、南画そのものから連想されるコレクションをご紹介します。



左:奥原晴湖 《秋景山水図》1878年
右:奥原晴湖 《山風溪雨図》1908年頃

III. 椅子の美術館より シャルロット・ペリアン

シャルロット・ペリアン(1903-1999)は建築家として、家具などの室内デザインも数多く手がけた女性です。彼女もまた、ひとり男性社会のなかに飛び込み、制作活動に邁進しました。建築家ル・コルビュジエらと協働し家具デザインを手がけ、日本にもたびたび訪れるなどその活動にはさまざまな人物や文化との豊かな交流がありました。椅子の美術館とも称する当館では、彼女が携わったデザイン椅子、《バスキュラン・チェア/LC1 スリング・チェア》や《LC4 シェーズロング》などを収蔵しています。ペリアンは、作品制作の際、鋼管や皮革、木材など素材を巧みに活用しました。ここでは、ペリアンが交流した作家、デザインに携わった椅子の素材や形態を起点として、コレクションをお見せします。



シャルロット・ペリアン、ル・コルビュジエ、ピエール・ジャンヌレ 《LC4 シェーズロング》デザイン:1928年

IV. 公園のなかから 重村三雄

当館の屋外、裏階段にひっそりとたたずむ人物群、《階段》は、多くの人が足を止めて見入り、そばに寄り添って時間を過ごす作品のひとつです。本作を制作した重村三雄(1929-2012)は、FRPという素材との出会いによって、人の不在や時の経過を浮かび上がらせるような人物像を制作しました。リアルでありながら一種の空虚さを感じさせる人物像には、見た目に量感をもたせつつも、実際には軽量のプラスチックであるFRPという素材の特性が生かされているといえるでしょう。

重村の作品からは、作者のユーモアを感じるとともに、迫真的であるからこそ、その人物の存在が眼前にないことを痛烈に感じさせる、いわば不在の感覚をも受け取ります。この不在の実感、あらゆる造形活動の根源的な欲求を想起させます。姿かたちの無いもの、例えば神の姿や死者の面影、または、眼前から刻々と消えていく光や移ろう時間など、捉えがたい不在の対象があるからこそ、人はその姿を作品にとどめようと制作に向かうのではないのでしょうか。不在の対象はどう表現されてきたのか、コレクションのなかから見出していきます。



重村三雄 《階段》1989年

アートの楽しさをみなさんへ！ -コロナ禍での普及事業の取組-

今年の2月28日に新型コロナウイルスの影響で当館も臨時休館となり、美術館の普及事業の実施が難しくなりました。私たちの大きな使命は「美術館と人をつなげること」だと考えます。そのつながりをコロナ禍でどうつければよいのか、これまでのつながりを保つためには何ができるのか日々検討しました。インターネットでの配信はどこにいても情報を受け取れる素晴らしいものですが、やはり直接みて感じていただけるような場を提供したいと強く思い、館内で行えることを探しました。当館は公園内にある美術館のため、犬の散歩やウォーキングなどをする方が多くいらっしゃいます。そこでコロナで美術館が臨時休館中でも、そばを通る方がいるという強みを生かし、館内から「美術館は元気だよー！ お互い乗り越えようね！」というメッセージを視覚的にわかるように発信することにしました。

一つ目は、『マリリン！ ソーシャルディスタンスの幅の巻』と名付けた取組です。当館で人気の椅子《マリリン/ボッカ》は、横幅が約2mあり、両端に人が立つとちょうど推奨されていたソーシャルディスタンスとなります。「これだ！」と思い、いそいそとエントランスまで運んだのですが、館の曲面ガラスでゆがんでみえてしまうことに気づき、窓際に置くのは断念して、エントランスの中央に置くことにしました。ソーシャルディスタンスの提示はできませんでしたが、予想外の新たな見方を提供できたと実感しました。臨時休館中も館内は夜までライトアップしていました。夜中、エントランス中央に鎮座する唇はどことなく、さみしそうでしたが、夜ならではの美しさがありました。

二つ目が、『ミニ！ グッドデザインの椅子美術館』の取組です。当館は椅子の美術館としても親しまれており、約70種類の椅子を所蔵しています。臨時休館前までは館内にある椅子に自由にお座りいただきました。小さなお子様から大人のお客様まで楽しそうに、またリラックスした表情でお座りになっている様子を見ると、椅子を選んで展示したスタッフも嬉しいものでした。しかし中には、安全上お座りいただけなかった椅子もありました。そこで、「こんな時こそ！」と思い、椅子紹介コーナーの設置を考えました。

今まで出していなかった椅子を総合受付の裏に展示し、外からも鑑賞できるようにしました。椅子は数週間ごとに展示替えをしています。座ることはできなくても想像を広げることで椅子を楽しんでいたのではないのでしょうか。例えば、梅田正徳《月苑》は、鮮やかな赤い花の真ん中に座った時のことを考えるととても心がときめきます。アルネ・ヤコブセンの《オックスフォード》は当館の会議室で使用しており、これまでは来館者向けに展示する機会はありませんでしたが、美しい曲線を味わっていただけただけではないかと思えます。この原稿の執筆中も「ミニ！ グッドデザインの椅子美術館」のコーナーは継続しています。長年、美術館に通われている方からも、「初めて見る椅子があって楽しめた」と、うれしいお言葉をいただきました。

まだまだ普及事業の実施に難しさがある状況ですが、これからも美術館と人がつながるための「何か」を考えていきたい、そして来館された方に気持ちの良い時間を過ごしてほしいと考えております。(I.A.)



スタジオ65 《マリリン/ボッカ》デザイン:1970年
5月頃に美術館の外から撮影しました。



梅田正徳 《月苑》デザイン:1988年
鮮やかな赤が目をおどります。



アルネ・ヤコブセン 《オックスフォード》
デザイン:1963年
背もたれが高く、曲線を描いています。